放友会友人とタケノコ狩りを楽しむ

星野　光雄　　氏家　盛通
中村　　豊　　長谷川　武

平均年齢 80 歳の友人 4 人が、傾斜の厳しい竹山でタケノコ狩りを楽しんだ。その 4 人とは、放友会員の星野光雄、氏家盛通、中村豊、長谷川武である。

久し振りに星野氏より 4 月中頃電話を頂き、タケノコ狩りに誘われた。自分は 15 年程前に茨城の笠間稲荷近くで、整備された「たけのこ畑」のタケノコ狩りを経験しているので、誘いが嬉しかったので即答で誘いに乗った。星野氏は舞岡自然公園近くの市民農園や竹山の管理等で舞岡リフレッシュ活動を担っており、中村、氏家、長谷川に声を掛け、リフレッシュ活動の参加者として他の 5 人の参加者と共に、実施日 4 月 23 日（土）が企画されました。

神奈川放友会の仲間を募って参加してほしいと誘われたので、他の二人にも声を掛けましたが、企画当日は都合がありダメでした。

春の旬の山菜というと「フキノトウとタケノコ」が目を引きますが、野山で野生のものを自分で収穫することはほとんど無いでしょう。だが、田舎出身の自分は子どもの頃にその経験はあるが、大人になってからは、60 年程の歳月の中でタケノコ狩りの経験は確か 2 度である。だが、氏家氏はほとんど経験ないし、中村氏も群馬で一度経験したと言っていた。

誘われた 3 人は 23 日の当日は、8 時 45 分、横浜市地下鉄舞岡駅集合で約束した。

星野氏が迎えに出向いているとは思っていなかった。中村・氏家氏と舞岡駅の出口で時間待ちをしていましたら、目の前を行ったり来たりする人がいたのですが、久しぶりの出合いに相手の顔が確認できず、戸惑っていたのです。双方が帽子にマスクと野良着スタイルだったのでが、星野氏らしき人と顔を見合わせながら通り過していました。待ち合わせの時間は 8 時 43 分の電車でしたので、星野氏は駅を一回りして再度私の前に現れ声を掛けてきました。これで星野氏であることを確認したと言うハプニングであった。

お互い笑い合って旧交が甦った。

星野氏は先に虹の家に向かったので、約束の時間に集合した 3 人は後を追って向かった。虹の家には舞岡駅より市民農園方向に約 10 分歩くと、舞岡虹の家に着いたが 9 時集合だったので、ギリギリでした。建物の右奥に向かってベンチが並んでおり、舞岡リフレッシュ活動の恒常的な集合場所になっていた。星野氏より極簡単な挨拶があり、本日の参加者は 8 人。他の四人の一人は星野氏と一緒の活動をしている世話人とシニアの女性及び 2 人の 40～50 代男性でした。

各人がタケノコ狩りの道具（唐鍬とスコップ）を持って、虹の家より 10 分弱右奥に入った田中康夫・稔成（父子）宅裏の竹山に向かった。

竹山は足場が悪く、足を取られたり、途中の抜かり地や傾斜が酷いので、くれぐれも無理せず注意するよう注意を受け、「何本でも掘って結構、兎に角十分気を付けること」の訓示を受けて、早々に傾斜の強い竹山に入った。30～40 度の傾斜ではなかったろうか、よく滑り足が取られ、タケノコを探すのには一苦労だった。大きくなったタケノコは数多く目に入るが、頭を出したばかりのタケノコを探すが中々見つからない。一週間前ならと思いながら、暫し歩き回って慣れて来てから、目標にしたタケノコを探すことが出来た。唐鍬で掘るにはさほど苦労はなかったが、スコップは不向きだった。2 時間ほど自由に挑戦し、収穫は各自 10 本ほどを掘り当てた。だが、何やら久しぶりの厳しい労働で、「疲れた～」足腰が立たない。平地に降りて休むが、喋るのが辛いほど疲れを感じた。

傾斜のきつい竹山は、歩きまわるだけでも難義だった。今回のような竹山は初めての経験だった。

四方山話で昼食をと話も出たが、近くに店は無し、身なりが悪いうえに持ちきれない程のタケノコの荷物があった上に、疲労感が大きかったので「別の機会を作って会いましょう」と昼食なしで、帰ることとなった。

疲労感が強く写真を撮るのも忘れていたが、帰り際になって辛うじてカメラをだしたら、星野氏の隣にいた別グループのﾏﾄﾞﾝﾅが「星野さん、私が撮ってあげましょう」と四人の記念写真を撮ってくれた。

久し振の歓談を楽しみにしたが出来なかったので、残念でしたがお誘いに感謝して解散した。

3 人はタケノコ堀りで疲れた顔でしたが、星野氏は元気いっぱいの顔でした。左より、星野・氏家・中村・長谷川